



TITLE:

生と歴史の論理学－田辺元「種の論理」の生成・構造・展開－(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

竹花, 洋佑

CITATION:

竹花, 洋佑. 生と歴史の論理学－田辺元「種の論理」の生成・構造・展開－. 京都大学, 2019, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2019-01-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13216>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	竹花 洋 佑
論文題目	生と歴史の論理学－田辺元「種の論理」の生成・構造・展開－		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本博士論文は、田辺元の「種の論理」の哲学的意味を明らかにすることを目的としている。「種の論理」は田辺の中心的立場として、先行研究においては繰り返し論じられてきた。しかし、ここで改めてそれを研究の対象とするのは、「種の論理」固有の哲学的価値が、正面から検討されることがなかったと考えられるからだ。これにはいくつかの事情がある。</p> <p>第一に、「種の論理」の国家主義への傾斜という問題がある。「種の論理」は当初から政治的権威ないしは主権の正当化という政治哲学を内包していたが、それは結果として、現存する国家を無の「応現」という仕方で肯定する議論に行き着く。「歴史的現実」や「死生」という講演などでの田辺自身の発言と相まって、この点は厳しく批判されてきた。もちろんこの問題を見無視して「種の論理」を語ることはできないが、これにのみ焦点を当てるならば、国家主義的変容という帰結から、いわば逆算的に「種の論理」の展開が理解されてしまうことになる。これと関連して、第二に、現在の田辺哲学への関心が主に戦後の展開に向けられているという点が挙げられる。今日注目を集めている田辺による象徴主義の理解や死者論は、戦後の田辺の思索に属する。田辺自身が『懺悔道としての哲学』において、それまでの立場を自力的理性主義とし、それとの関係で他力の立場を強調しているという事実がこうした傾向を下支えることで、「種の論理」固有の価値はますます見えにくくなってしまう。なぜなら、その場合には『懺悔道』以降の後期哲学の否定的な踏み台と認定されてしまうからである。そして最後に、西田哲学と関わる問題がある。田辺自身がはっきりと述べているように、「種の論理」自体が西田哲学批判である、ゆえに西田哲学の存在を抜きにして「種の論理」の意味を論ずることはできない。実際、「種の論理」は提唱の当初より、その意味が西田哲学との関係で論じられてきており、現在に至る。したがって、西田哲学に欠落しているものを探るという仕方で「種の論理」の固有性を把握しようとした場合、その試みは成功しない。田辺自身が独自のものだと言う彼の視点（社会や歴史の問題、「種」の問題）も、仔細に見るならば、西田哲学にも同様に認められるからである。さらに、絶対無を媒介性において捉えようとする観点については、西田哲学からの遺産であると言うより、むしろ田辺独自のものであろうが、この観点が意義を発揮するのは、いわゆる「種の論理」の立場の範囲内ではなく戦後の『懺悔道』以降のことである。</p> <p>「種の論理」は、当時の社会的・政治的文脈から決して切り離すことができず、ま</p>			

た今日の我々から見れば到底容認できない言説を含んでいることも、確かである。同時に、「種の論理」が西田哲学に依存しながら構築されたものであるということも事実である。しかしながら、「種の論理」は国家論や西田批判論である以前に、あくまでも哲学として理解されるべきものであり、理解されうるものなのだ。本博士論文の思索の根底を貫いているのは、このような問題意識である。

ただ実際、「種の論理」というのは、多様な関心が入り組み、極めて複雑な内実を有し、しかも常に生成途上にある論理である。したがって、「種の論理」を哲学としてのその価値を際立たせるために、本論文はその本質と考えられるものを、次のようなあえて単純なテーゼによって表現することにした。すなわち、「種の論理」とは「生」を特殊性において把握する論理である。そして、これが「種の論理」とは何であるのかという問いへの本論文の答えである。

では、「生」を特殊性において理解することが、なぜ「論理」という意義を持つと言えるのか。それは、田辺において特殊性は「媒介性」を意味し、そしてこの「媒介性」こそが論理的であることの本性そのものと見なされるからである。このような見地から、田辺は「生」と「論理」という異質なものの接点を探ろうとしたのだ。同様の問題は、当時、西洋の思想界のみならず、西田を筆頭とする日本の思想界においても広く共有されるものであった。「生」は特殊的であることによって論理との通路を持ちうるという田辺の見解は、当時の西洋思想やまた日本の哲学者の思想と比較しても、独創的なものであったと言える。

「第1部 「種の論理」の生成」の課題は、「種の論理」へとつながる考えが田辺の思想の中でいつ、どのような必然性によって浮上したのかを明らかにするというものだ。本論文では、「種の論理」の萌芽は、1930年の田辺による西田哲学批判にあると見なす。具体的には次のようなことだ。西田の「絶対無の自覚」では、歴史的生の実相を掴むことができない。この「絶対無の自覚」の批判を通して提唱されたのが田辺の「否定原理」であるが、この原理こそが「種」の発想の原型であるということを示す（第1部・第1章）。当初、絶対者の否定的他者として想定されたこの「否定原理」は身体性に内面化され、そこに「弁証法の基本的所在」が求められる（第1部・第2章）。同時に、歴史における個性性と全体性のあり方をめぐる問いが、一度は拒絶したはずの西田の「絶対無」の概念を、田辺の思索に呼び寄せる（第1部・第3章）。身体性、および「永遠の今」としての「絶対無」という二つの要因が、田辺のヘーゲル解釈に確固とした方向を定めることになる。このようにして、田辺は西田的な「述語の論理」という磁場から逃れ、「繫辞の判断論」を生み出すに至った。コブラに暗示された、特殊による個別と普遍との媒介という「繫辞の判断論」の基本モチーフは、やがて「種の論理」へと彫琢されてゆく（第1部・第4章）。

「第2部『種の論理』の構造と展開」では、「種の論理」の哲学的な意義、およびそのあり方を変えてゆく経緯が論じられる。まず、田辺が提唱する「種」の意味が明

らかにされる（第2部・第1章）。「種」という概念が用いられる場合、そこには何らかの生命を示唆するもの、そして個と類に対する特殊という二重性が意識されている。田辺の意味する「種」とは、「生」といっても個人的生命のことではなく、むしろ個々の「生」の基盤としての無意識的な「共同的生」のことである。こうした無意識的な「生」を個体とも普遍とも区別された次元として設定し、それを両者の媒介として位置付ける。これが、特殊性としての「生」の意義である。このような思索は「社会存在論」として具体化される。要するにそれは、「個」の働きによって「種」が、当初の無意識的基底から「個」の対立者へ、さらに自覚的に引き受けられた「個」の存立要件へと、そのあり方を変容させていく過程なのである。これが「種の論理」の基本構造に他ならない（第2部・第2章）。しかし、田辺はその後、この「種の論理」の当初の基本構造を、徐々に、場合によってはラディカルに変更することになる。その動因は二つある。一つは「絶対媒介の論理」であり、もう一つは歴史の問題である。

「絶対媒介の論理」において、「種」は基体の意義を担う。この点を重視することで、主体的個の立場を特徴とする時間に基づく歴史論は、空間的・社会的なものに媒介された「世界」に立脚する。ここに田辺は、歴史哲学の可能性を見出そうとする（第2部・第3章）。しかし、「種の論理」から展開したはずの「絶対媒介の論理」が、逆に「種の論理」自体に根本的な再考を促すことになる。あらゆるものが媒介されて存在することを主張する「絶対媒介の論理」においては、「媒介者たる生もまた、媒介されたるもの」として理解されなければならないからである。「種」の自己否定性とは、そのような仕方では把握された「生」の媒介態としての本質であるのだ（第2部・第4章）。以上のような「種の論理」の練り直しを通して、その歴史的生の論理としての独自の立ち位置が、一層明瞭になる（第2部・第5章）。「絶対媒介の論理」は、絶対無のあり方をめぐって田辺の思索にさらなる展開をもたらすことになる。田辺は、歴史における全体性を個にとっての「超越的全体」と捉えていた。無は求められた普遍性として、有限の向こう側に仰ぎ見られるような無限という性格を多分に有しているとも考えられる。しかし、これは田辺の媒介性の立場に反する。無は有の向こう側にあるものとしてのみならず、有そのものに己を顕現するものとしても考えられねばならない。これが、田辺の言う無の「還相」面である。このような見解が当初の歴史哲学への関心と結びつき、田辺は、国家を歴史の主体とする「国家的存在の論理」を提唱、そして同時に、より原理的な永遠の時への「還相」を主張する「歴史主義的時間存在論」を生み出したのである（第2部・第6章）。

「種の論理」の本質は、生を媒介の相において捉えることにあり、それはすでに論じた通り、生成の前史と展開の具体面を具えたものと理解できる。それは結局、田辺の思想全体に対していかなる意義を有したのであろうか。「種の論理」が、「懺悔道」の立場を端緒とする田辺後期の哲学の否定的な踏み台ではないとすれば、それは

いかなる積極的価値を持ちうるのか。

この問いに対して本論文は、「種の論理」の展開が田辺の思索にもたらした積極的な成果は、歴史主義であると答える。戦前の田辺の思索の終着点を、もっぱら「国家的存在の論理」に置く場合、田辺哲学の関心は、政治哲学から「懺悔道」という宗教哲学へ移行したということになるが、この見方は飛躍だと言わざるをえない。しかし、本論文は、前期の田辺哲学の最終局面である国家論は、あくまでも時間論との関係で理解されるべきだと主張する。すなわち、両者はそれぞれ「還相」の哲学の具体論と原理論とも言うべき位置にある、ということだ。そう考えるならば、前期と後期(戦後)の思索の間には、非連続性だけではなく同時に連続性があることになる。なるほど、「還相」が具体的に生じる場は国家から個へと移行しており、なによりも、哲学の立脚点が、他力と呼ばれる超理性的で脱意志的なものへと根本的に転換している。このことは決して低く評価されるべきではない。

田辺哲学の原理たるべき「絶対無」は、自らの他者である有において現象することで、媒介の本性を完遂する。これは後期哲学の根幹的主張であるが、実はすでに前期、永遠と時との関連から明確に打ち出されている。つまりそれが「歴史主義的時間存在論」であったのだ。この意味において、田辺哲学の地殻変動は、前期すでに生じつつあったと言える。「懺悔道」の思索が、以上のような「歴史主義」の地盤を受け継いでいるということは、『懺悔道としての哲学』が「徹底的歴史主義」を標榜していることから、窺い知れる。必ずしも目立つとは言えないこの「歴史主義」は、戦後の田辺が自らの立脚地を表現する概念として選んだものだ。そのことは、後期の思索の精髓ともいうべき『数理の歴史主義展開』の表題が明示しているのである。

(論文審査の結果の要旨)

田辺元の「種の論理」は、田辺哲学において独自に形成された最初の立場であり、一般に先行研究もその重要性を認めているが、しかし、複雑、多様で未完成なこの「種の論理」に焦点を当て、本格的に取り組んだ研究は未だ存在しない。竹花洋佑氏の博士論文は、「種の論理」の生成と展開の全過程を綿密にたどり、その哲学的な意味を徹底的に解明したものである。先行研究においては通常、「種の論理」は、国家主義的な社会存在の論理として、あるいは西田幾多郎の哲学への批判から生れた、西田哲学の社会的・歴史的次元の欠落部分を補完する論理として理解されてきたと言えるが、本博士論文は、そのような通説を再検討し、独自の方法によって「種の論理」の哲学的意義を見事に引き出している。

田辺哲学は、西田哲学としばしば比較されるにもかかわらず、その研究が十分に掘り下げられ蓄積されているとは言い難いという現状において、本論文は、密度の高い田辺の思想の内実を明るみに出すことに成功した。先行研究は概して、戦後の田辺思想に重要性を認めているが、竹花氏は敢えて、1930年代に誕生し構造化された「種の論理」の根本的な見直しを切り口とし、田辺哲学の理解を一新するような解釈を呈示している。これは本論文の重要な成果の一つである。「種の論理」を主題とする論文および関連論文のすべてが、極めて精緻な手法により読み解かれ、その上で西洋哲学、西田哲学を批判的に受容した田辺の思索の揺れ動く現場が、丹念に描き出されている。

本論文は、「第1部「種の論理」の生成」と「第2部「種の論理」の構造と展開」の二部で構成される。第1部は「種の論理」の通常見えにくい萌芽を前期(終戦前)の思想の中に探り、本研究の前置きという性格を有している。第2部は、第1部で準備された基本モチーフが洗練されてゆく過程を論証しつつ、「種の論理」の哲学的意味を解明するという目的を果たす。

第1部における優れた成果の一つは、「「種の論理」の発想の原点」として田辺の提起した「否定原理」に着目した点にある。1930年、田辺は、西田の「絶対無の自覚」では、「歴史の非合理性の問題」を伴う「生の実相」というものを捉えることができないと批判する。この批判を通して浮上したのが、「個体にも全体にも還元されることのない第三の項」である「特殊」として規定される「構造的原理」、つまり「否定原理」である。竹花氏は、この原理により、後述の「生」という概念が説明される段階で「種の論理」が成立したと主張する。西田の「絶対無の自覚」という「究極の立場」を「発出論」として否定し、田辺自らは、「歴史的生」の次元に「自己の相対性という場面」を確保する。論者は、このように説明し、田辺が哲学的基盤を「否定原理」から「種の論理」へ発展させたという、独自の見通しを提出している。

本論文は、従来とは異なる視点により「種の論理」の展開を捉えているが、この点は、田辺哲学研究への特筆すべき貢献として高く評価されてよい。これまでの「種の論理」の一般的な理解は、次の通りである。「種の論理」構想の動機は、戦争や言論思想の統制という時局の下、国家による個人の強制力の問題に取り組むことにあったが、こ

の「論理」が、国家を絶対化する傾向に陥り、思想的には挫折、結局、次の「懺悔」という立場に移行した。要するに、「種の論理」は後期哲学への否定的踏み台となったに過ぎない。これに対して本論文は、立場の移行に思想的断絶ではなく、むしろ後期(戦後)哲学への連続的展開を見るべきだと主張する。つまり、この「種の論理」の展開という捉え方によれば、田辺の思索の中に「歴史主義」に関する積極的成果を見出すことが可能となるというわけである。

竹花氏が「種の論理」の全展開のうちに掴み取り、精査した「歴史主義」の問題は、本論文の根幹をなすものであり、またこれを最もよく特徴づけている部分だと言えるが、特に第2部で、その核心に迫っている。田辺の「歴史主義」とは、「永遠超越者」を含む「あらゆる存在」を歴史的なものとして捉える態度であり、その本質は「歴史において現象する」ことにある。つまり、永遠と時間との関連で捉えられた「歴史主義」は「歴史主義的時間存在論」と呼ばれる。また国家論も歴史哲学の意味を有し、国家は「歴史の主体」であると理解される。論者はこのように、前期における「種の論理—国家論—歴史主義」の連関を明かにする一方、後期の「懺悔道」や「数学基礎論」にも「歴史主義」が受け継がれていることを強調する。

本論文には注目すべきもう一つの成果がある。田辺は、当時ドイツで流行した「生の哲学」の影響を受け、「生」を「種」と解釈し、「生＝種」は「個」や「類」とは区別されながらも、同時に両者の「根拠」とであると規定した。「生＝種」は「個」と「類」とを媒介するのである。この「生」の「媒介性」とは、正に「種の論理」の原理に他ならない。「種の論理」を「生の媒介性という相」において捉えるという発想は、他に例を見ない。論者は、「生」の「種」としての意義が「媒介性」において発揮されるということは、「生において論理的なものが立ち現われることを意味する」と主張する。このようにして「種の論理」に「生の論理」という新たな価値が見出されたのである。

膨大なテキストの細部に注意を向けた入念な調査と自由な発想、そして厳密な思索により、極めて専門性と完成度の高い博士論文が、田辺哲学を専門とする第一世代初の研究者により提出された。ただ、再検討すべき課題もいくつか残されている。「歴史主義」という立場は戦後の田辺哲学に受け継がれ発展するということが説かれながら、具体的な考察はなされておらず、多少の物足りなさが残った。また「生」の問題の扱い方がやや不明確で、課題が未整理であるという印象を受けた。しかしいずれも、本論文の価値を何ら否定するものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2018年8月27日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。